［書評］21

いまでもアラン・ブルームのことを憶えていらっしゃいますか？そして今でも興味があると言ってくださいますか？

高田康成

アラン・ブルーム／松岡啓子 訳

『シェイクスピアの政治学』

ヒトラーの迫害を逃れて、米国に亡命した優秀な知識人の一人にレオ・シュトラウス（一八九九―一九七三）がいて、この哲学者が育てた一群の弟子たちはシュトラウシアンと呼ばれる。いまではその孫弟子さらには曾孫弟子たちが結社のような組織を形成して、折に触れて物議をかもす。わたしが初めて実際にシュトラウシアンに遭遇したのは八〇年代の半ばのこと、第袖というか異端というか、本家のシュトラウスでさえ驚愕を一番読んだだけで、さまざまな裏事情について全くの無知であったときである。当時、東北大学文学部に勤務していたわたしは、（その時分はまだ）若手であった野家啓一氏と意気投合して、日米教育委員会から派遣されるフルブライター（フルブライト・プログラム派遣教授）を囲んで国際的読書会をやろうということになった。（既に若手ではなかった岩田靖夫先生も、気が付くと主要メンバーとして鎮座しており、この会は長く続いた。）入れ替わり立ち代り仙台に来てくれるフルブライターの一人に若い政治哲学者がいて、偶々この人がシュトラウシアンだったのだ。こちらはと言えば六八年の洗礼を受けた（西欧中心主義の批判的相対化に理有りと信ずる）身、レヴィ・ストロースの「野生の思考」を盾に、構造主義的文化相対論の可能性はそれなりに自明と考えていた。しかし、突如目の前に出現したシュトラウシアンは、それは文化相対主義あるいは価値相対主義という近代の病に罹っているのだと宣告した。この診断には少なからず驚いたが、彼が落んに奪める総本山シュトラウスの著作に窺える辛抜な解釈と思考力に魅力を感じながらも、わたしは最終的に折伏されなかった。

若いシュトラウシアンが帰国すると、期せずして、アラン・ブルームの『アメリカン・マインドの終焉』（一九八七年）が世界的ベスト・セラーとなり、わたしは再び「近代の病」を思い起こされることとなった。[1] 言うまでもなく、アラン・ブルーム（一九三〇―一九九二）はレオ・シュトラウスの愛弟子にあたり、いわゆる第一世代のシュトラウシアンの代表選手である。[2] 八〇年代に行われた文化をめぐる新旧論争のさなかに、ブルームは敢然と保守本流を名乗り、台頭しつつあった歴史・文化相対主義的傾向を批判して、一世を風靡した。偉大な西欧文化の潮流に位置し、普遍的価値を有するギリシア古典を大学教育のカリキュラムから外し、代わりに歴史の浅い周辺文化の文物を平等主義と価値相対主義の名において導入するなどもっての他、というわけだ。要するに、昨今のわが国で「カルチュラル・スタディーズ」とか「ポスト・コロニアリズム」などと呼ばれる流派とは、真っ向から対立する思想に他ならない。言うまでもなく、このアンチ文化相対主義の思想は、師匠であるレオ・シュトラウス譲りのものである。

師匠のシュトラウスには、アメリカという伝統の希薄な新天地において、ヨーロッパでは成し遂げられなかったであろう古典主義的教育を実践してみようという目論みがあった。ギリシア古典を例えば真剣に受け止め、それを精密に読む方法を学ぶならば、そこに蹟られている書遍へ至ろうとする意思あるいは超越的真理を求める心的態度を体得することになる。この一種

丸山眞男とマルクスのはざまで
田口富久治著　世界と日本のコミュニズム運動やマルクス主義への認識や判断に、どういう点で隔りがあったのか。丸山から教えられたことと丸山研究を通じて理論的に総括。　本体3500円

現代ドイツ地方税改革論
関野満夫著　ドイツの市町村税の構造変化と改革論議の動向を、市町村営業税を中心に歴史的・実証的に検証。分権化社会を支える地方税体系のあり方とはいかなるものか。　本体4000円

アメリカ資本主義とニューディール
橋井敏郎著　合衆国最大の構造転換期ニューディール期の歴史的意義を質う。連邦政府が権限を大幅に拡大していく中での新しい民主主義制度と経済の関係を明らかにする。　本体3800円

■シリーズ都市再生／全3巻
① **成長主義を超えて**
大都市はいま
矢作弘・小泉秀樹編著　本体3200円
② **持続可能性を求めて**
海外都市に学ぶ
小泉秀樹・矢作弘編　本体3200円
③ **定常型都市への模索**
地方都市の苦闘
矢作弘・小泉秀樹編　本体3200円

■eデモクラシー・シリーズ／全3巻
第1巻 **eデモクラシー**
岩崎正洋編　本体2500円
第2巻 **電子投票**
岩崎正洋著　本体2500円
第3巻 **コミュニティ**
岩崎・河合・田中編　本体2500円

■15歳からの大学入門
小樽商科大学・高大連携チーム編
わかる経営学
本体1200円
美しい経済学
本体1300円
守る！企業法学
本体1500円

日本経済評論社
〒101-0051東京都千代田区神田神保町3-2
電話03-3230-1661㈹ FAX03-3265-2993

アラン・ブルーム著
松岡靖子訳
四六判・218頁・2730円（税込）
2005年・信山社

の歴史主義的解釈の方法は、近代に優勢になったもう一つの歴史主義（歴史・文化相対主義）を批判するのに有効だろう。「歴史」と「文化」と「言語」と「テクスト」の外に人は立てないと雄弁に説く近代的思潮に抗して、それはあのプラトンの「洞窟の比喩」に言う、影を見て光を見ない連中と同じだとシュトラウスは喝破する。今も昔も、哲学の役割は「洞窟」から出て真理を希求することにあると。[3]

シュトラウスの薫陶を受けた愛弟子ブルームが、歴史と文化に関して相対主義を排し、古典主義的保守主義に立ったとしても全く不思議はない。（ただひとつ弟子の犯した逸脱は、『アメリカン・マインドの終焉』の成功により、はからずも自ら軽蔑する「俗悪な大衆」に迎合してしまったことだろうか。）

そのシュトラウシアンを代表するブルームが、シェイクスピアを論じて存外多作であったことは、あまりよく知られていない。そもそもブルームは寡作な学者であった。おそらく本人に主著はなにかと尋ねたならば、プラトンの『国家』とルソーの『エミール』の翻訳だと応えるに違いない。翻訳が主要業績などと言えば、少なくとも現在のわが国の大学では人事選考に通らないはずだが、ブルームはユダヤ人としてそれまで人種コードがあったアイヴィー・リーグ（コーネル大）に初めて戦を得た人物の一人である。ここでも、古典的作品の読み（翻訳）が評価されたということだろう。先述のベスト・セラーは学術書ではなく、『巨人と小人』（一九九〇）も評論集というカテゴリーに属すると考えられる。そうすると残る研究業績としてはシェイクスピア関係の二著ということになる。[1] なかでも、この度見事な日本語に翻訳された『シェイクスピアの政治学』は、ブルームの論考のなかでは最も学術的と称しうる佳作である。

シェイクスピアと政治学という組み合わせは、一見、奇異に響くかもしれない。シェイクスピア研究は膨大な市場と化して久しく、「シェイクスピア・インダストリー」とまで呼ばれるこの国際的営為のなかでは、やれ「シェイクスピアとフェミニズム」だの、やれ「シェイクスピアとグローバリゼーション」だの、果ては「仏教から見たシェイクスピア」といった主題が真剣で論じられており、実際「政治的シェイクスピア」という表題の書物は革新的トレンドを目指す研究者の必読書とまでなっている。その意味でならば、『シェイクスピアの政治学』は

何ら驚くに足らない。

皮肉と言うべきか、ブルームのシェイクスピア解釈で驚くべきは、その徹底した歴史主義的姿勢である。『シェイクスピアの政治学』はヴェネチアを舞台とした二作品（『ヴェニスの商人』、『オセロー』）と古代ローマを背景とした作品『ジュリアス・シーザー』を扱うが、解釈に際してブルームは、それぞれの時代背景の意義と重要性を見逃さない。アリストテレスの「人は政治的動物」である、すなわち「都市（ポリス）」に限定を受けた存在であるという定義が、ブルーム的解釈学の根本原理を提供する。

ルネサンス期前後のヴェネチアは、東西交易の要衝ということもあって、西欧世界で最も自由な都市であった。そこにはキリスト教徒のほかに、ユダヤ人も生活を営むことが許され、さらにキリスト教徒に改宗すればムーア人でさえ公的身分に付くことが理論的に可能だった。これは少なくとも当時のイギリスでは享受しえない政治環境であった。この自由はしかし、思わぬ札束と衝突とさらには悲劇を生み出す原因にもなった。すなわち、惜しみなく与える愛を至上の徳と信じるキリスト教徒（アントーニオ）と、律法の遵守こそ至上の義務と信じるユダヤ教徒（シャイロック）との衝突は、ヴェネチアという政治環境を措いて想像しがたい。ヴェネチアはしかし、この宗教間の衝突に解決を与えない。われわれは有名なポーシャの機知溢れる裁定により一件落着の印象を得るかもしれないが、彼女は「シャイロックとアントーニオが争うもととなった諸々の問題を解決するという点では、原則的には何もしていない。そして解決の道はどこにもない。我々にできることは、それらの問題を忘れるために、急ぎベルモントに戻ることだけである。ベルモントは愛の都である。だが、それは実在しない。ユートピア

藤原書店
▶作家、編集者、出版関係者、必読書！◀
作家の誕生
A・ヴィアラ　「職業作家」「商業出版」の誕生の歴史を描く「古典」的名著、遂に完訳！　塩川徹也監訳 5775円
ゾラの可能性
表象・科学・身体
小倉孝誠・宮下志朗編　ゾラは新しい！　各分野の旧弊を代表する執筆陣による初の成果！　3990円
マーラー
交響曲のすべて
C・フローロス　音楽理論の粋が初めて包括的に論じた記念碑的成果。　前島良雄・前島良雄訳 9240円
曼荼羅の思想
頼富本宏・鶴見和子　強者の論理を超え、異なるものが共に生きる「曼荼羅の思想」の可能性を徹底討論。2310円
竹内浩三楽書き詩集
まんがのよろづや
よしだみどり編　「天性の詩人」の詩／絵／マンガに色を付けて再構成！　〈オールカラー〉1890円
〈ジョルジュ・サンド セレクション〉
[1] モープラ ―男を変えた至上の愛
小倉和子 訳・解説　至上の恋愛小説！　女性の愛に導かれ、立派に成長を遂げる青年の物語。　4410円
〈決定版〉正伝 後藤新平
[3] 第二次桂内閣時代 1900～16年
鶴見祐輔　逝去直前、初代鉄道院総裁として近代日本のインフラを全面整備した内政の黄金時代！　6510円
月刊 機
B5変32頁　9月号 No.165
I・イリイチ／高橋巨一／○・パス／山田鋭夫／寺田光雄／河辺一郎／黒田壽郎／加藤晴久／吉増剛造／国際伊都子／一海知義／久田博幸／西脇好子 他
年間購読料2000円（送料込）　◎見本誌・ブックガイド進呈　＊表示価格税込
〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町523
振替 00160-4-17013　TEL03-5272-0301
ホームページ http://www.fujiwara-shoten.co.jp

なのである」（五七頁）。シェイクスピアは、芝居という実験場で、文明・宗教の衝突を具体的に起こし展開し、その結果その現実的解決はとりあえず不可能だとしたと言うことになろう。

さらに本当はこわいシェイクスピアとなれば、ムーア人でありながらキリスト教徒となってヴェネチアの傭兵隊長に出世したオセローの悲劇だ。ヴェネチアという都市は、キリスト教共同体の普遍性において、オセロー的な存在を許した。オセローはさらなる普遍性へ向けて一歩を踏み出してしまう。ヴェネチアの名家の白人令嬢との結婚である。ヴェネチアは「コスモポリタン」な人物を受け入れるが、その都市が培ってきた伝統文化や常識を犠牲にしてまで、その人物に奉仕する気はさらさらなかった。デズデモーナの父親は、オセローと娘の結婚が原因で死んでしまう。オセローも自身のコスモポリタン振りの限界を自覚するとともに、野性が露呈してゆく。都市の伝統文化にある仕来りの強初さと、コスモポリタニズムの皮相さという両者を、巧妙にそして悪辣に利用するのがイアーゴーの悪といわれるものの中身に他ならない。「本来その地に属さないものは、いつかある時点で、その地本来のものの気質に反するようになる」（二一〇頁）。

相対主義的歴史主義を批判したシュトラウシアンは、ここで、恰もミイラ取りがミイラになったかのように、完璧な歴史主義者になったかの印象を与えるかもしれない。しかしそれは違う。相対主義の「洞窟」から抜け出ることはおよそ困難なことではない。ただ振り向けばそこに真理の光が垣間見られるというほど甘くはない。「洞窟」からの脱出は、その中に置かれた状況をつぶさにそして忍耐強く観察し分析することを通じてしか可能にならない。プラトニストはコスモポリタニズムを忌避する。

ブルームの「オセロー」論と同じく、本書の白眉とも言うべき『ジュリアス・シーザー』は、きわめて緻密な分析とバランスのよい判断からなり、それを単純化して紹介すれば却って害を及ぼすのではないかと懸れる。ただし、「シェイクスピア劇のローマ人はイギリス人ではなく、本物のローマ人、すなわち、近代人とは性質の異なる情念と目標を抱く別種の人間である」（二四四頁）という解釈の根本原理は、再度確認しておく必要があるだろう。この重大な差異について、わが国のシェイクスピア研究者の多くが甚だ無頓着であるのはわずか驚きを禁じえない。しかし、紙幅も尽きたことでもあるし、警句はこれまでにしよう。あとはブルームの魅力的な語り口をもよく伝える翻訳に譲る。いまでもアラン・ブルームを憶えているか否かにかかわらず、是非ともこの翻訳書を一読いただきたい。「政治哲学」を忘れた「演劇研究」、「演劇」を忘れた「政治哲学」には、打って付けの強壮剤となること、間違いない。

（1）揶揄「アラン・ブルーム『アメリカ精神の閉塞』の衝撃」、『英語青年』一三四巻九号、一九八八年一二月二一四頁参照。

（2）ブルームは魅力的な知性が常にそうであるように、奇妙な存在だった。保守主義者にしてホモセクシュアル。インディアナポリスの小売商に出自をもつ貴族的主義的大学教授。そのプロフィールは友人であったソール・ベローが抜のために書いた伝記小説『ラヴェルシュタイン』（二〇〇〇年）に窺える。決して結好よくも美くもない。しかしどこか決定的にカリスマ性のある大学教授という主人公は、家庭を捨てるでもなく、アジア系の美男子との同棲生活を送りながら、シカゴ大学で政治哲学を講じ、少数の優秀な弟子を育て、一種秘密結社風の学説をなす。彼に慫せられた学生が家を訪ねれば、クラシック音楽が耳を塞ぐほどに響き渡る。教え子のなかには、ホワイトハウスや国防省などの要職に就く者が輩出し、電話魔の彼は彼らとの交信を日々欠かすことがない。数年前には、かねてよりの授業に基づき、「ポリティカル・コレクト」に失表される政治的生涯にして文化的相対主義の流行を批判して書いた本がゆくりなくもベストセラーとなった。その結果、一躍有名人となるばかりではなく金満家ともなったわけだが、それはいいようから前の貴族趣味を捨てるだけであった。パリを愛し、よく出かけ超豪華ホテルを定宿とせずにはいられない。美青年を愛し、黒かにも超高級車をプレゼントせずにはいられない。

ブルームを含むシュトラウシアンを、隣接のシュトラウスの思想との差異において、批判的に論じた好著に Pure Politics and Impure Philosophy: On Allan Bloom, Leo Strauss and the Politics of American Empire（Yale UP, 2006）がある。

（3）シュトラウスとカール・レーヴィットとの間に「近代諸学の交信」というのがあって、そこでも、歴史の「洞窟」は超えがたいのだとするレーヴィットに対して、シュトラウスは持論のプラトニズムを展開する。詳しくは拙稿「Modernity Debate Once More: Karl Löwith and Leo Strauss」、『ヨーロッパ研究』（DESK東京大学）IV（二〇〇四）二三―五五頁参照。

（4）あとの一冊は Shakespeare on Love and Friendship（U of Chicago P, 1993）。

（たかだ・やすたり　表象古典文化論）

佐藤康宏・板倉厚哲・長澤徹侍・玉蟲敏子・木下直之編

講座　日本美術史（全六巻）

各巻A5判上製・平均三六〇頁・定価四四一〇円
＊印既刊

＊第1巻　**物から言葉へ**（佐藤康宏編）
【執筆者】有賀祥隆／田邊三郎助／鈴尾紀一／山本聡／林温／田本雄子／松浦茂／黒田泰三／佐藤康宏／塚原晃

＊第2巻　**形態の伝承**（板倉厚哲編）
【執筆者】千戸鶴之輔／板倉厚哲／板文雄介／河野元昭／亀岡徹／相澤正彦／武田光一／佐藤康宏／長尾伸一／王蟲敏子

＊第3巻　**図像の意味**（佐藤康宏編）
【執筆者】佐藤康宏／長澤徹侍／奥武彦／相澤正彦／板倉厚哲／須藤弘敏／中島隆／浅野秀剛／奥平俊六／佐藤勝彦／佐藤康宏

＊第4巻　**造形の場**（長岡龍作編）
【執筆者】長岡龍作／太田昌子／木下直之／海老根聡郎／宮崎克子／柳宏佳／梶元紀介／国領伊紀／南健太／大久保純一

第5巻　**〈かざり〉と〈つくり〉の領分**（玉蟲敏子編）
【執筆者】都丸泰介／田中重光／金行信輔／玉蟲敏子／武笠朗／日埜博／西川祐子／鳥方崇／丸山修作／木下直之

＊第6巻　**美術を支えるもの**（木下直之編）
【執筆者】木下直之／丸山修作／佐藤康宏／荒屋鉄平／佐藤康宏／荒屋鉄平／平瀬礼太／岩佐光晴／藤／北澤憲昭／吳孟恩／三浦敏子／三浦篤

東京大学出版会（表示は税込価格）